〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:https://www.omachi-sanpaku.com
市立大町山岳博物館公式 Web サイトは、大町山岳博物館友の会の支援により博物館が運用しています。

OMACHI ALPINE MUSEUM
市立 大町山岳博物館

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からもご覧いただけます。

2019
冬号
第 64 巻 4 号
無料 Free

表紙の1枚 ……1
・雪は天から送られた手紙である
山博コレクション ……2～3
・植物さく葉標本から
北アルプス フィールドガイド……4～5
・大沢小屋の変遷にみる山小屋のすがた
博物館のひろば ……6～7
山博友の会だより/展示・イベントのご案内……8
・サークル「山岳文化研究会」の活動から
・常設展スペシャルガイド
・ライチョウ展示時間延長のお知らせ
・ライチョウ基金シンポジウム2020

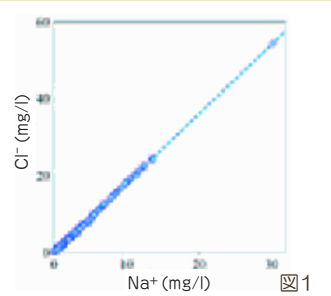


図1

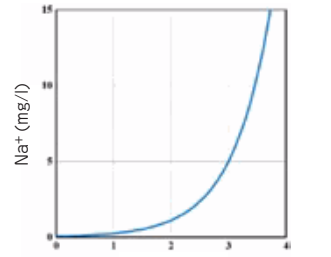


図2

積雪から手紙文を読む作業（穂高連峰）
図1. 雪の中に含まれるナトリウムイオン濃度と塩化物イオン濃度の関係
図2. 雪を降らせた積雲対流の高さと雪の中のナトリウムイオン濃度の関係

雪は天から送られた手紙である

鈴木　啓助

山岳博物館から見える山並みも雪を戴きはじめ、北アルプスに冬の季節が巡ってきました。ところで、皆さんは「雪は天から送られた手紙である」という文章を知っていますか。これは、1938年に創刊された岩波新書赤版20点の中の1冊として発行された「雪」のなかで、中谷宇吉郎が記した名文句です。私は、「雪」を読んで雪のことを研究したいと思うようになりました。中谷は、気温と水蒸気の量を調整できる実験装置により、様々な条件で人工的に雪の結晶を作り、中谷ダイヤグラムを完成させました。中谷ダイヤグラムは、気温と水蒸気の量によって、どのような形の雪結晶ができるかを示したものです。これを逆に考えれば、雪結晶の形を観察することにより、雪結晶が成長した雲の中の気温と水蒸気の多寡がわかることになります。例えば、樹枝状結晶は気温が-15 ℃前後で、比較的水蒸気量の多い雲の中ででき、角柱結晶は気温は-10～ -20 ℃前後と幅広いですが、水蒸気量の少ない雲の中でできることなどがわかります。まさに、雪は天から送られた手紙であり、その暗号を読み解く鍵が中谷ダイヤグラムなのです。

私も天から送られた手紙を読んでみたくなりました。私は、雪の形ではなく雪に含まれる化学物質に注目しました。図1には、降雪中のナトリウムイオン濃度と塩化物イオン濃度の関係を示します。それぞれ濃度が高い時も低い時もありますが、ある直線上にのっていることがわかります。この直線は海水中のふたつのイオンの濃度比を示しています。このことから、降雪中のふたつのイオンは海塩を起源としていることがわかります。では、どうして雪の中にたくさん含まれている時と余り含まれていない時があるのでしょうか。調べたところ、雪が降る時の積雲対流の高さ（強さ）によって海塩起源のイオン濃度が決まることがわかりました（図２）。このことは、地上で降雪を採取してナトリウムイオンなどの海塩起源物質濃度を調べれば、その濃度の大小から、雪を降らせた積雲の対流活動の強さがわかることになります。私も雪から送られた手紙を読むことができました。

（市立大町山岳博物館　館長）

◆市立大町山岳博物館は、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休となります。
◆開館時間は、午前９時～午後５時（入館は午後４時30分まで）です。
◆毎月第３日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、**「大町市民無料開放デー（長野県民割引）」**として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は1月18・19日、2月15・16日、3月14・15日です。この機会にぜひご来館ください。
◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。**《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名／未就学児／大町市内小・中学校に通う児童・生徒／大町市内在住の65才以上の方》**
このほかにも観覧料の各種割引があります。詳しくは受付窓口でお尋ねください。

博物館施設案内はこちら

植物さく葉標本から

千葉　悟志

博物館等にはたくさんの収蔵品があり、それはまさにお宝です。そのなかには、生物標本というものが含まれます。生物標本はその地域に確かに息づいていた生命の証拠で、これを保管・管理することは博物館の使命であり、後世に引き継ぐための重要な業務のひとつです。

山岳博物館にもたくさんの生物標本がありますが、ここでは登録・配架を進めている植物さく葉標本（押し花）についてご紹介いたします。

山博友の会会員によるさく葉標本の作製はほぼ隔週で行われています。

標本は登録、配架されると同時にデータはサイエンスネットミュージアムに提供され、ウェブサイトで閲覧できるようになります。（近日の公開予定）

博物館が保管・管理するさく葉（よう）標本（令和元年11月現在、約7800点の登録が完了）は長野県内を中心に集められ、その多くは昭和の採集品です。

個人コレクションの寄贈を除くと、当館職員であった故平林国男氏や故高橋秀男氏、それと長野県立大町南高等学校（以下「南高」）生物部による標本が多くみられます。

氏らの標本は、北アルプスを中心に残されていますが、なかには南アルプスを縦走しながら採集したと思われる標本も残されています。

一方、南高生物部が残した標本は1950年代前半の数年に限られますが、その範囲は扇沢～針ノ木岳・蓮華岳、八方尾根や白馬岳、木崎湖や居谷（いや）里湿原（りしつげん）、小谷村～糸魚川市の間に至り、精力的に多様な環境に出向き学んでいたことに感心させられます。

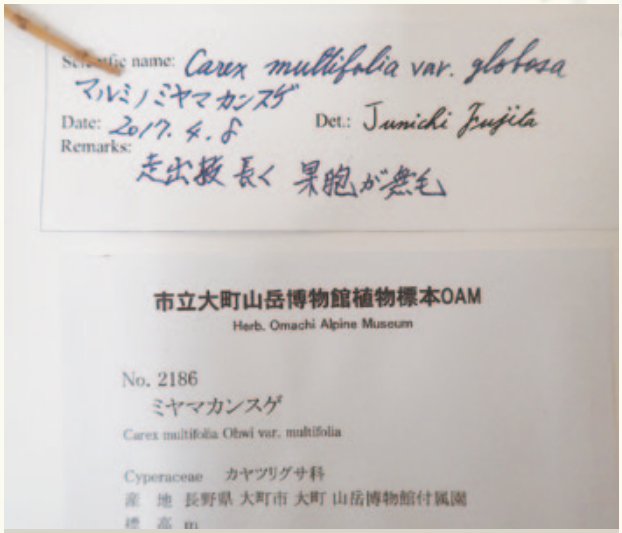
中綱湖のサイコクヒメコウホネ。台紙上での配置が考え抜かれて押された標本はもはや芸術品
（寄贈　藤田淳一氏：長野県植物研究会会員）

また、標本と一緒に残されているラベルには、検定（いまは「同定」と言います。この植物がこのなまえ（種名）であると決めた人です）をした人物名が残されていて、なかには「日本の植物分類学の父」と称される牧野富太郎（1862-1957）や牧野と並び日本の植物分類学の基礎を築いた大井次三郎（1905-1977）の名が記されていて、研究者らと交流を図りながら先人たちが知識を深めていったことを伺い知ることができます。

このように、先人たちが集めた標本には、基本的に種名、採集場所、採集日、採集者、同定者といった情報が記され、その価値が一層高められていますが、そのお宝は大切にしまわれたままでは価値が薄れてしまいます。

そこで山岳博物館では、昨年からサイエンスネットミュージアム（S-Netと呼ばれ、http://science-net.kahaku.go.jp/にアクセスすると、いろいろな博物館等から提供されている標本データの閲覧ができます）にデータを提供しています。S-Netに登録をすると併せて地球規模生物多様性情報機構（GBIF、https://www.gbif.org/）にも登録されることから、世界中で閲覧が可能となり、広く知っていただくことができるようになるというわけです。

標本の閲覧は時として、研究者の間でアノテーションラベルを通じて「この標本はこういった特徴を持つことからラベルにある種名ではなく、こちらの種名だと思う」だとか、その標本をまた



貼付されたアノテーションラベル（上）

長野県植物研究会会員の解説に耳を傾ける友の会会員ら。大北地域の植物分布調査は今年（2019）で2年目。

別の人が見て「私もそう思う」だとか「いや、これこれこうだからラベルにある種名が妥当だ」だとかといった議論が繰り広げられることがあるそうです。一つの標本をめぐり、そのようなやり取りがなされるというのは面白いものですよね。そして、そのようなやり取り（アノテーションラベルの貼付）がされればされるほど実は標本の価値を高めることにつながり、聞くところによると、台紙にぎっしりとアノテーションラベルが貼られている標本が世界にはあるようです。

撮影した写真や個人が記したメモ（野冊等）ではこういったやりとりは難しいのかもしれません。実物である標本であれば確認や見直しができるわけですから、やはり標本を保管するということは今後も変わらず博物館の重要な業務として続くことでしょう。

それには、湿度や温度管理のほか害虫から守ることが大切となり、博物館では日々標本が害に合わないように気を付けています。そのため、いつでもだれでもご利用いただくわけにはどうしてもいきませんが、博物館のお宝に興味、関心を高めていただくためにも、植物採集や標本作製の講習を企画し、多くの方と交流できる機会を設けられたらと考えています。

（市立大町山岳博物館　学芸員）

〔背景写真〕 北安曇郡松川村で採集されたシベリアメドハギの標本（寄贈　藤田淳一氏）

北アルプス フィールドガイド

大沢小屋の変遷にみる山小屋のすがた

関本　景香

皆さんは山小屋と聞いたとき、どのようなイメージを持つでしょうか。ここでは、大町市につくられた大沢小屋について、建築に焦点を当て山小屋のすがたを紐解きたいと思います。

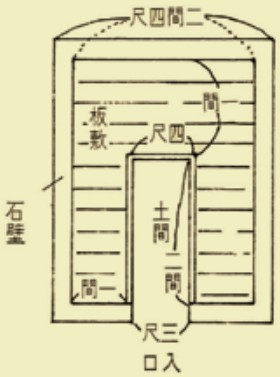
初代大沢小屋から２代目大沢小屋へ

初代の大沢小屋は、大正14（1925）年、篭川谷大沢に建設されました。木造平屋建て、板葺き屋根の梁間３間×桁行４間の建築でした。中央に通路のように土間を通し、その左右に板間を設け、囲炉裏を配していました（写真１・２）。一間という最小限の広さですが、食事や就寝、また、炉で暖まったり休憩できる多機能な空間といえます。昭和20年代の写真からは増築された勝手場が確認できます。また、昭和４（1929）年には西側に別棟（２間×２間）が建設されるなど、登山者の増加や機能拡充の必要に伴って新増築しています。初代大沢小屋は、昭和44（1969）年に２代目大沢小屋（写真３）が同所に新築されるまで、人々の山行を44年間見守りました。

写真１　初代大沢小屋の再現模型（部分）（S=1/1）
市立大町山岳博物館１階常設展示にて

木造小屋だけじゃない?!　大沢石室

初代大沢小屋の建設に先立って、この地には石室と呼ばれる石積み置き屋根の建築があり、大沢小屋や別棟とともに昭和初期まで併存していました（写真４）。現在はかつての石積みの痕跡をのこしています（写真５）。大正６（1917）年の建設で、四方石壁、板葺き屋根の梁間２間４尺×桁行３間の建築でした（図１）。建設の参考とされた仕様によると、屋根材は１寸以上、入口部分に幅４尺×奥行２間の土間を設け、土間を炉として使用すべき旨が示されています。



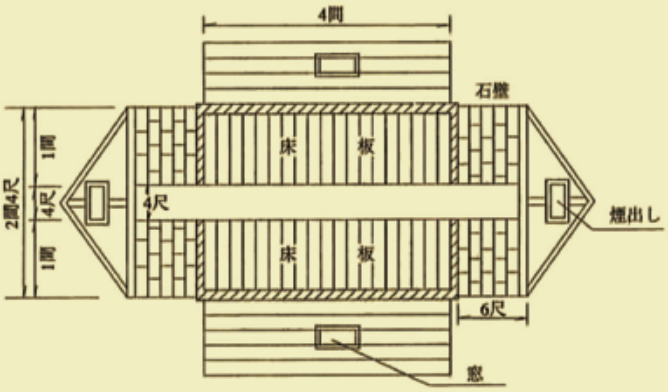


図１　大沢石室　平面図（原図：河野齢蔵書簡）　大町市史 第５巻 民俗・観光より転載（左）
図２　長野県設置石室（大）　展開図（原図：白馬村誌）北アルプス この百年より転載（右）

大沢の石室は、長野県が大正８（1919）年、登山者の安全と利便性をはかるため、県内10ヶ所に石室を設置する方針を決定した際のモデルともされています。その仕様は、大小それぞれ２間４尺×４間、２間４尺×３間で、四方を石積み、内は中央を土間とし、その左右に板間を設け、屋根には１寸厚の板を使用する等の規定があり、大沢石室と共通する部分が多くみられます（図２）。

山小屋のすがた

大沢小屋と大沢石室は、木造と石造という大きな違いがあるものの、土間と板間に囲炉裏を配した一間の空間であるという共通点が挙げられ、大沢小屋と県設置石室は、中央に土間を通しその左右に板間を設けている点で非常に似ています。また、図２に煙出しと記されていることから、炉を焚くことを想定したものであることが分かります。これらの事例の共通点からは、大正６（1917）年建設の大沢石室をモデルに、県設置石室の仕様が検討・実施され、さらには大沢小屋が建設されていく、建築の仕様における通時的なつながりを感じさせます。一間という最小限の広さに多くの機能が一体化されたつくりは山小屋建築の一つの特徴といえるでしょう。

石造から木造へ変化している点からは、山小屋が、既にある建築を踏襲しつつ、環境や時代に合わせて増改築を行い、改良を重ねてきた歴史の一端を垣間みることもできます。

山小屋建設の計画　大沢小屋編

写真２　初代大沢小屋　大正14（1925）年頃【個人蔵】（左）

写真３　現在の２代目大沢小屋（右）

大沢小屋は、近代登山の発展に貢献した百瀬慎太郎によって計画され、建てられました。初めは山小屋の存在に否定的だった慎太郎ですが、近代以降、文化人や大衆の人々の登山への気風が高まるにつれ、登山環境の整備、登山に関する利便や安全面から小屋の必要性を感じるようになり、建設の構想を抱くようになったといいます。自身も大正12（1923）年に厳冬期の針ノ木峠越えを計画するも吹雪に見舞われ、大沢の石室に５日間停滞し、石室に吹き付ける風の寒さや、焚火の煙に苦しめられたというエピソードがのこり、この経験が木造小屋建設の契機ともされています。

山小屋建設の計画　大沢石室編

写真４　大沢石室　大正８（1919）年頃【個人蔵】（右）

写真５　現在の大沢石室跡（左）

大沢石室は、植物学者である河野齢蔵がその設計をしたと考えられます。設計図は大正６（1917）年の河野から百瀬慎太郎（河野は小学校時代の校長であり恩師）への手紙に示されており、前掲のとおり建築規模や構造、仕様について詳細に説明されています。さらに、建設場所の選定と経費の見積もりを願い出ていることから、慎太郎がこれらについて引き受けて行ったと推測されます。今では、山小屋としての機能をなくしてしまった大沢石室ですが、その歴史を探ると、建築的な面だけでなく、近代登山の歴史を紐解く上でも重要な遺構であることが分かります。

（市立大町山岳博物館 学芸員）

【参考】(1) 峯村隆：大沢の石室について（前），山と博物館，第37巻，第2号，p.4，1992.2 (2) 峯村隆：大沢の石室について（後），山と博物館，第37巻，第3号，p.4，1992.3 (3) 柳原修一：北アルプス山小屋物語，東京新聞出版局，pp.103-110，1990.6 (4) 大町市史編纂委員会（編）：大町市史 第5巻 民俗・観光，pp.1046-1050，1984.7 (5) 市立大町山岳博物館：對山館と百瀬慎太郎，pp.17-18，2002.10 (6) 菊地俊朗：北アルプス この百年，文藝春秋，pp.143-153，2003.10

博物館のひろば

社会教育主事実習の受け入れを行いました 令和元年８月20日（月）

大町市教育委員会生涯学習課では、８月13日～ 30日（14日間）、社会教育主事の実習生１名の受け入れを行いました。

期間中、市内の公民館などの社会教育施設へ各日ごと現場の実地見学を兼ね、各施設の業務内容や役割について学びました。

山岳博物館では８月20日に実地研修が行われ、山岳博物館の歴史から始まり、管理体制、資料の収集保管状況、調査研究、企画展をはじめとする教育普及の現状について説明を受けた後、実際に学芸員が展示案内を行って子どもたちに解説を行っている様子などを見学しました。実習生は大町市出身の大学生。将来は大町の社会教育の現場を牽引してもらいたいと願っています。

企画展「北アルプスの山小屋」現地見学会を開催しました

令和元年８月31日（土）～９月１日（日）

企画展の関連事業として、「上高地徳本峠小屋ほかの現地見学登山」を１泊２日で開催し、22名が参加しました。

島々から徳本峠小屋までの道は、近代以前には杣人や炭焼き、野草の採集と生活に欠かせない道であり、明治時代以降は、ウェストンや芥川龍之介、高村光太郎・智恵子夫妻などが通った道であり、歴史を追体験しているような心躍る経験をすることができました。途中、岩魚留小屋や徳本峠小屋などの建築の歴史や構造について、信州大学の梅干野先生からの解説を聞きながら、山小屋保護・保存の重要性について知る貴重な機会となりました。

大北地域の植物分布調査を実施しました 令和元年９月10日（火）

長野県の植物を網羅的に収めた「長野県植物誌」が刊行されてから20年ちかくが経過し、新たな種の発見や帰化等が予測されることから、長野県植物誌編纂委員会では昨年から本格的に県内の植物分布調査をはじめました。

この事業で山岳博物館は大北地域（大町市・池田町・松川村・白馬村・小谷村）を担当しています。

収集された証拠標本は長野県環境保全研究所のほか、各地域の博物館に収められ、後世に引き継がれるとともに、いつでも見直しができるように管理されます。

企画展開催に向けた現地調査を実施しました

令和元年9月11日（水）・12日（木）

来年度、当館では博物学に関する企画展の開催を計画しています。本展に供する記録写真のほか、白馬岳周辺の山岳文化史にかかわる現地確認や記録写真撮影を目的にして、昨年度から北アルプスで現地調査を実施しています。

今回は祖母谷方面（唐松岳～餓鬼山～祖母谷温泉）の現地調査を実施。明治40（1907）年、祖母谷～白馬岳周辺で植物採集を行いながら登山を行い、植物や地理・地質等の記録を残した富山県の魚津中学校（現魚津高等学校）博物学教諭・吉澤庄作の足跡の一部をたどるなどしました。

【写真：大黒銅山跡】

北アルプス最古の鉱物をもとめて

令和元年9月17日（火）～19日（木）

富山県宇奈月周辺に分布する２億年前の船津かこう岩の中から37億年前にできたジルコンという鉱物が2010年に発見され、当時としては日本最古、現在も北アルプスでは最古の記録になっています。

山岳博物館の所蔵標本・分析試料として、船津かこう岩と、日本では珍しい“中圧型”の宇奈月変成岩類を採集しました。

船津かこう岩の中にはマグマの中で結晶してできた美しい形のジルコンと、マグマにとけこんだ堆積岩に含まれていた摩耗した古いジルコンが含まれています。大量のかこう岩を粉砕して、摩耗したジルコンを発見できるか、分析の結果が楽しみです。

【写真：船津かこう岩】

「信濃大町 山フェス2019」が開催されました

令和元年9月28日（土）

この催しは「信州山の日」「山の日」の趣旨にもとづき、大町市で毎年開催されているもので、今年で5回目となります。

今年も当館前の大町公園をメイン会場として、隣接する長野県山岳総合センターと当館がサブ会場となり、終日開催されました。当日は一日を通じて盛りだくさんのイベントがあり、約700名の参加者でにぎわいました。当館では山フェスにあわせて無料入館や各種イベントを行い、この日は275名の入館者がありました。ほかにも博物館スタッフが公開ラジオ生放送に出演するなどし、博物館の展示や活動内容を広く知っていただく良い機会となりました。

ちょうじや文化講座に講師を派遣しました

令和元年10月5日（土）・19日（日）

ちょうじや塩の道博物館を会場に行われているちょうじや文化講座に山岳博物館から指導員と専門員を派遣し講演を行いました。

「ライチョウの不思議あれこれ」ではライチョウの飼育で不思議に思ったヒナの誕生の仕方、寒い高山で過ごす鳥なのにヒナは寒さに弱いので飼育でも注意をしなくてはならないことなどを話題にしました。

「大町山岳博物館の化石に学ぶ私たちの生い立ち」では、私たちが生物と人類の進化を速やかにくりかえして成長してきたことを紹介して、「大北のまごころ」が今の時代に大切であることを話し合いました。

高山植物の生活史研究のための種子採集を行いました

令和元年10月9日（水）～11日（金）

山岳博物館では、NPO法人白山高山植物研究会の協力のもと、高山植物の生活史研究を実施しています。

この度も白山における種子採集に同行し、試料提供をしていただきました。これまで、育てた個体は、平成30年度に山小屋風に建設したニホンライチョウの展示棟周辺に移植し、栽培や高山の景観の再現について試験的に試みています。

今年はミヤマオダマキやミヤマクワガタ、ハクサンフウロ、ヨツバシオガマ、オンタデを含め27種の開花が見られました。

【写真：ヨツバシオガマの種子】

学校との連携授業～市内小学校～

令和元年7月～11月

当館では、市内の小学校を対象とした「学校との連携授業」を毎年行っています。

小学校の社会科・理科授業の一環として博物館にお越しいただき、百瀬慎太郎やライチョウ、地質などに関して、展示資料を実際に見ながら学芸員が解説するもので、学校で学んだことをより一層理解する機会を提供しています。

7月以降順次行われ、10月に南小学校の４年生が訪れた際には、百瀬慎太郎やライチョウのくらし、カモシカの骨格を利用した体のつくりに関して展示資料を実際に見ていただきながら学芸員が解説を行いました。

「第20回小松屋の夕べ　山の話と播隆さん」に講師を派遣しました

令和元年10月21日（月）

太田宿草鞋の会・ネットワーク播隆共催によって岐阜県美濃加茂市で毎年行われている講座で、山岳分野の講師による講演が毎回行われます。槍ヶ岳開山で知られる播隆上人が天保11（1840）年に中山道太田宿で没したことから、その命日に宿場の旧旅籠・小松屋で開催されているものです。

当日は岐阜県内を中心に約40人の参加者があり、「北アルプス後立山連峰をめぐる山岳文化史」と題した講演を通して、当館の展示に関わる山岳文化史の一端を知っていただくとともに、大町市や当館の活動について県外の方々に広くお伝えする良い機会となりました。

公開講演会「大町の恵み：山と水」を開催しました

令和元年11月9日（土）

2019年度陸水物理学会信濃大町大会が山岳博物館で開催されました。本学会は、陸水学や水文学の物理学的側面の研究を進展させる目的で設立されました。大町市での研究会の開催に併せて、同学会と山岳博物館との共催で公開講演会を開催しました。

大町市の恵みはなんといっても山とそこで涵養された水です。北アルプスに降る雪は豊富な水資源となるし、仁科三湖も貴重な湖沼生態系を育んでいます。さらに大町では、昔から工夫に富んだ水利用が行われていました。これらの話題について、荒井教育長と学会会員からの講演があり、参加者からも活発な質疑がありました。

信州大学の講義に講師を派遣しました　令和元年11月14日（木）

大町市と信州大学は連携協定を結び、様々な分野で共同での事業に取り組んでいます。

主に１年生を対象とした一般教養の授業において、依頼を受けた当館学芸員と指導員が外部講師として、松本キャンパスにてライチョウに関する講義を行いました。

ゼミと講義の２コマの授業で、計約100名の学生に、ライチョウの保全活動について当館の取り組みを中心に説明しました。

ライチョウに関することを多くの人に伝えていくことも保全活動の一つ。一人でも多くの学生が、ライチョウや高山環境について関心を持っていただけたら幸いです。

山博（さんぱく）友の会だより

当会またサークル４団体（ボランティアの会・烏帽子の会・花めぐり紀行・山岳文化研究会）の活動は、博物館公式HPでご覧いただけます。

サークル「山岳文化研究会」の活動から

友の会サークル「山岳文化研究会」（代表　宮澤洋介さん）では、山岳文化史に興味・関心のある会員９名が集まり、登山史を含めた北アルプス周辺の歴史や民俗などについて、お互いに調査研究を重ねています。定期的に会合を持ったり研修会を行ったりしながら、会全体や個人としてそれぞれの研究テーマにもとづいた調査研究活動を行っています。

今年度の活動の中から、最近の様子をご紹介します。

（1）第２回定例会　９月21日（土）

通常の定例会は夜間、博物館に集まり、各メンバーから個人研究の進捗状況を報告しながら情報交換していますが、今回は昼間に集まり、博物館学芸員が行っている山岳図書資料の配架作業（本棚に本を並べる作業）に協力しました。

この日は５名のメンバーが参加し、慣れない図書分類に頭を悩ませながら、根気と体力を必要とする配架作業に悪戦苦闘。しかし、徐々に慣れ、予定していた午前中だけではなく、残れるメンバーで午後まで作業を延長して熱心に取り組みました。

（2）研修会（兼第３回定例会）　10月５日（土）

今年度の研修会として、白馬村ウイング21で開催された白馬山案内人組合創立100周年記念イベント「HAKUBA山フェスタ」に５名のメンバーが参加しました。２日間開催されたイベントですが、１日目の午前中に当会として参加し、希望者のみ午後や２日目も引き続いて参加しました。

会場では「白馬嶽」「白馬沢」の地名が記された江戸後期の絵図「山論済口絵図」（文政８年）の複製パネル展示を見学したり、田中欣一先生の基調講演「山を拝むという思想」や白馬岳の山名考に関するパネルディスカッション「ハクバかシロウマかどっちがホント？」を聴講したりして、後立山連峰の山岳文化や現在の登山に関わる事例を学びました。

このほか、会場には地元グルメを味わえるフードコーナーもあり、頭もお腹も満足させることができた半日でした。

（サークル「山岳文化研究会」事務局担当：関・関本）

展示・イベントのご案内

常設展スペシャルガイド

11月～３月までの「家庭の日」（各月第３日曜日・市民無料デー）に家族や友達どうし博物館で楽しみながら学んでいただく機会にと、常設展の展示解説を行います。

■**日時**　令和２年１月19日（日）、２月16日（日）、３月15日（日）のご希望の時間帯（解説時間は60分程度）
■**会場**　市立大町山岳博物館　常設展示室
■**対象**　５名様以上の団体
■**申込み**　博物館まで電話・ファクス・Eメールにて、氏名、連絡先、参加人数・時間を事前にご連絡いただき、お申し込みください。
■**参加費**　通常の博物館観覧料。ただし、大町市民は無料。長野県民は団体割引料金。

ライチョウ展示時間延長のお知らせ

令和元年12月１日（日）からライチョウの展示時間を延長し、午後４時30分までとします。展示開始は午前11時からです。

野生の白いライチョウを間近に見ることは難しいので、公開中のライチョウをご覧いただき、その生活を知っていただきたいと思います。

なお、ライチョウの体調や管理の都合で予告なしに展示の中止や時間を変更する場合がありますのでご了承ください。

ライチョウ基金シンポジウム2020

動物園等でのライチョウ保全の取り組みを紹介し、ライチョウの現状と保全について、理解を深めていただく内容です。

■**日時**　令和２年３月８日（日）
正午～午後１時…受付
午後１時～４時…報告、パネルディスカッション、写真展、ライチョウグッズ販売
■**会場**　サン・アルプス大町
■**対象**　小学生から大人
■**申込み**　博物館まで、電話・ファクス・Eメールにて、代表者の氏名、連絡先、参加人数をお知らせください。定員（200人）に達しない場合は当日参加も可能です。参加費無料。

編集・発行
市立大町山岳博物館 OMACHI ALPINE MUSEUM
―創立1951年―
〒398-0002　長野県大町市大町8056-1
市立大町山岳博物館　編集責任者　鈴木啓助
TEL. 0261-22-0211　FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:https://www.omachi-sanpaku.com

2019 冬号
第64巻４号

発行日　2019（令和元）年12月25日
印　刷　有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町3871-1
TEL.0261-22-3030　FAX.0261-23-2010